全国54,000人の“海の救難ボランティア”の活動を支えます。

「青い羽根募金」にご協力を

青い羽根募金アドバイザー
阪神タイガース 城島 健司 選手

■募金の方法

口座振込みによる募金

郵便局
口座番号　00120-4-8400
加入者名　社団法人 日本水難救済会

銀　行
三井住友銀行 日本橋東支店
口座番号　(普)7468319
加入者名　社団法人 日本水難救済会
青い羽根募金口

インターネット募金

青い羽根募金　検索

クレジットカード　MasterCard　VISA　JCB　AMERICAN EXPRESS

電子マネー　ちょコム

- ホームページから以下の方法で募金ができます。
- クレジットカードはMasterCard、VISA、JCB、AMEXがご利用できます。
- NTTコミュニケーションズが提供するネット専用電子マネー「ちょコム」がご利用できます。

●お問い合せ先　0120-01-5587

募金フリーダイヤルでお申し出くだされば、振込料無料の専用郵便振替用紙をお送りします。

社団法人 日本水難救済会

〒102-0083 東京都千代田区麹町4丁目5番地 海事センタービル7階
TEL：03-3222-8066　FAX：03-3222-8067
http://www.mrj.or.jp　E-mail　V1161@mrj.or.jp

ありがとう競艇
「このイベントは競艇の交付金による日本財団の助成を受けて実施します」

平成22年度 日本財団 The Nippon Foundation 助成事業

マリンレスキュージャーナル

Vol 102 No 2
2010|8月号

特集 マリンレスキュー紀行

海の安全にかける男たちの群像

千葉県水難救済会　鴨川救難所

「青い羽根募金 2010」活動レポート

MRJ歴史探訪シリーズ 第3回

ボランティア精神の源を訪ねて

社団法人 日本水難救済会
マリンレスキュージャパンは、(社)日本水難救済会の愛称です。

Part 1

平成22年度 日本水難救済会 名誉総裁表彰式典

お言葉を述べられる名誉総裁高円宮憲仁親王妃久子殿下

名誉総裁表彰審査委員会委員長の挨拶

来賓として招かれた、左から前原誠司国土交通大臣、鈴木久泰海上保安庁長官、琴陵容世金刀比羅宮宮司

水難救助の功績に対し、3団体2個人が表彰されました

平成22年5月21日、海運ビル(千代田区平河町)において「平成22年度名誉総裁表彰式典」を挙行しました。

名誉総裁である高円宮憲仁親王妃久子殿下ご臨席のもと、来賓として前原誠司国土交通大臣、鈴木久泰海上保安庁長官、琴陵容世金刀比羅宮宮司を招き、式典を盛大かつ厳かに執り行いました。

式典では、表彰状または感謝状が、名誉総裁表彰審査委員会委員長の相原力会長から伝達され、名誉総裁より受賞者に対し、名誉総裁盾(団体)または名誉総裁章(個人)が直接授与されました。

表彰を受ける高知県水難救済会宇佐救難所の上野所長

前原国土交通大臣より祝辞をいただきました

高知県水難救済会宇佐救難所

長崎県五島中央病院

SGホールディングス株式会社

ジュン ペイジ氏

■平成22年度名誉総裁表彰受賞者

項　目	団体・個人名	表彰理由
海難救助功労 (団体)	高知県水難救済会 宇佐救難所	平成21年9月27日、高知県土佐市宇佐沖合で遊漁を終え帰港中の遊漁船「エピソード」から乗船者１名が海中へ転落。海上保安庁から救助要請を受けた救難所員3名は操船者と捜索者との連携のもと、転落位置から数マイル離れた海域で転落者を発見、救助した。
洋上救急功労 (団体)	長崎県五島中央病院	洋上救急事業の協力医療機関として、これまで31件の洋上救急事案に対して52名の医師・看護師を派遣、巡視船や航空機等に同乗して出動し、傷病者36人に対して医療処置を行った。
事業功労(金品寄贈) (団体)	SGホールディングス株式会社	日頃から水難救済事業の重要性を深く認識され、青い羽根募金強調期間中には全国の社員が一斉に青い羽根を着用して業務に従事するなど、青い羽根募金活動に全社を挙げて取り組み、多年にわたり多額の寄附をされた。
事業功労(金品寄贈) (個人)	ジュン ペイジ (Mr. Jun Page)	本会の正会員であり、水難救済事業へ多大なご支援をくださっていたペイジ グラハム ジョン氏が、平成21年3月10日にご逝去。ご子息のジュン ペイジ氏は故人のご遺志を汲み、日本水難救済会の発展のためにと本会に多額の寄附をされた。
事業功労(金品寄贈) (個人)	河崎則子	平成20年11月1日、熊本県の八代海で遊漁中の夫を海難事故で亡くされたことから、水難救済事業の重要性を深く認識。捜索救助活動等に役立てて欲しいとの強い思いから、平成22年3月23日「青い羽根募金」に多額の寄附をされた。

Part 2

平成22年度 海上保安庁観閲式及び総合訓練

単縦陣で受閲態勢に入る大型巡視船群

東京救難所所属の救助船「曙光」も参加

第55回海上保安庁観閲式に当会名誉総裁がご臨席

海上保安庁は平成22年5月29日および30日の両日、「海上保安の日」記念行事の一環として、第55回目となる海上保安庁観閲式及び総合訓練を東京湾羽田沖で実施しました。

全国から集結した巡視船艇・航空機によるパレードや海難救助訓練などが行われ、29日には観閲官として前原国土交通大臣が出席、30日には当会名誉総裁の高円宮憲仁親王妃久子殿下がご臨席され、船上で青い羽根募金活動を行った海洋少年団員とも交流されました。

受閲航空機隊のヘリコプター

観閲船　第3管区（横浜）の「やしま」

ガールスカウト神奈川県第3団・第51団のみなさん

名誉総裁の高円宮憲仁親王妃久子殿下も青い羽根をつけてご臨席

海上保安庁音楽隊が演奏を披露

前原国土交通大臣に青い羽根を着用いただきました

船上ではミス日本「海の日」を中心に青い羽根募金も行われた

青い羽根募金活動を行った海洋少年団と名誉総裁　高円宮憲仁親王妃久子殿下

マリンレスキュージャーナル

Vol 102 No 2
2010|8月号

CONTENTS

01 Shot of the MRJ
平成22年度 日本水難救済会 名誉総裁表彰式典／海上保安庁観閲式及び総合訓練

06 特集　マリンレスキュー紀行
海の安全にかける男たちの群像
千葉県水難救済会　鴨川救難所

12 全国地方救難所のお膝元訪問
ニッポン港グルメ食遊記【千葉県鴨川市／鴨川漁業協同組合】

13 「青い羽根募金2010」活動レポート
平成22年度 青い羽根募金強調運動／青い羽根募金支援自動販売機の設置状況／広報・周知活動／平成21年度 青い羽根募金の使用実績

17 MRJ歴史探訪シリーズ　第3回
ボランティア精神の源を訪ねて
「海事関係者からの奉納物」

19 レスキューグッズの最前線
マリンレキューMONOギャラリー

21 レスキューステーションNEWS
救難所だより
新設救難所の紹介／海難救助訓練

25 レスキューレポート　水難救助活動報告
海難救助／洋上救急

32 水難救済思想の普及活動レポート

35 MRJ互助会通信

37 MRJフォーラム　読者の広場

38 MRJからのお知らせ

表紙：千葉県水難救済会 鴨川救難所の皆さん

特集　マリンレスキュー紀行

海の安全にかける男たちの群像

千葉県水難救済会　鴨川救難所

鴨川救難所の皆さん。鴨川港を臨むマリーンブリッジの上にて。

「一番怖ろしいのは二次災害。出動した所員の無事が、いつもなにより気がかりです」海の安全を守る女性所長と、彼女を支える海の男たちの肉声に迫る。

取材協力：鴨川市漁業協同組合

漁業の場、そしてマリンレジャーのメッカでもある「鴨川」

関東地方の南東に位置し、三方を海に囲まれた千葉県。その多くを占めているのが房総半島だ。太平洋を流れる黒潮の影響で気候は温暖、海水浴やサーフィン、釣りなどのマリンレジャーを楽しみに、1年を通じて多くの観光客が訪れる人気エリアである。

この房総半島の太平洋側南東部にある鴨川は、水族館で有名な鴨川シーワールドに象徴される観光地であるとともに、サーフィンや釣りを愛する人々の聖地となっている。また、沿岸漁業に適し、春夏秋冬豊かな海の幸に恵まれる地域でもある。サバやアジ、イワシにイカ、そして近年漁獲量が減少するキンメダイなど、豊富な種類の魚が水揚げされる。

今回ご紹介する鴨川救難所は、鴨川の漁業を支える鴨川市漁業協同組合を拠点としている。取材当日、港のほど近くにある漁協の事務所を訪ねると、周囲の電柱や建物にはカモメならぬトビが群をなしてこちらを見下ろしていた。港に水揚げされる魚を目当てに集まるのだろう、その様は鴨川の海の豊かさを象徴しているように思われた。

鴨川救難所の救助船「第二かもめ丸」の進水式。

取材当日はもやが濃く、多くの漁業者が海へ出ることをあきらめた。

女性所長を中心に、海の男たちが力を合わせる救難所

鴨川救難所に所属する救難所員は現在65名。漁協を拠点とする関係上、その全員が漁師である。

そして彼らを束ねるのが、救難所長の松本ぬい子さんだ。今回はほかに、副所長の松本喜代隆さんと岡崎良次さん、救助長の坂本年壱さんと部長の庄司喜吉さん、書記の徳山英樹さんが集まって下さった。

「鴨川市漁業協同組合では代々組合長が救難所長を兼務しているので、私が所長ということになっていますが、名誉職のようなもの。女性は船に乗せないのが鴨川の伝統なんです。ですから、水難救助活動の主役はここに集まった皆さんなんですよ」と松本さんが言うと、すかさず岡崎さんが「この所長がいなければ、ほかのみんなは動きませんよ！」と合いの手を入れ、その場の皆さんは笑いながらうなずいた。「所長が陸で指示を出して、我々が無事で戻るのを待っていてくれるから、がんばれるんです」と庄司さん。互いに信頼し、力を合わせて水難救助活動に取り組んでいることが、皆さんの様子からうかがえた。

「私たちが担当しているのは鴨川港を中心としたエリア。けれど、仲間の船が事故にあったらどこへでも駆けつけて、1週間でも2週間でも救助活動をする覚悟があります。海で生きる者としては当然のことですよ」と喜代隆さんは身を乗り出して話して下さった。

冷静な観察眼を持つ、副所長の岡崎良次さん。

鴨川救難所の“太陽”、所長の松本ぬい子さん。

救難所の拠点となっている、鴨川市漁業協同組合。

行動力ある副所長の松本喜代隆さんは、所長のご主人。

海の怖さを知らないレジャー客の行動にハラハラ

とはいえ、海の怖ろしさを身にしみて知る漁業者の事故はそれほど多くはなく、鴨川救難所の管内では数年に1度程度。マリンレジャーのメッカとなっているこの地域で多いのは、やはり釣り人やサーファーの水難事故だ。

「今年3月にも、3名のサーファーが沖に流される事故が起こったばかりです」と徳山さんが、記録をめくりながら話して下さった。2人は自力で戻ったものの、残りの1人は所員の手によって救助された、という。

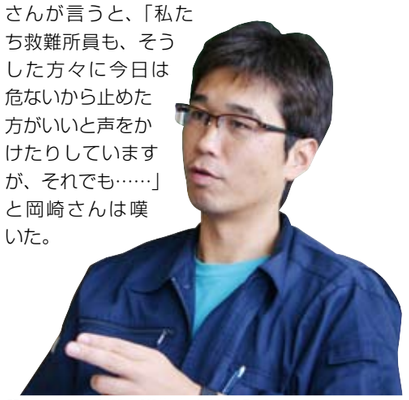
「150mほど沖に流されたという通報があって現場に向かったのですが、誰もいない。風向きを見て、これは、とさらに沖合に向かったら、1kmくらいのところでようやく発見できました。とんでもないところまで流されたものだと、あれには驚かされましたね」と救助に当たった坂本さんは苦笑いする。

沖へと流れる潮の力が強いのが鴨川の海の特徴だという。日本サーフィンの発祥の地として多くのサーファーが集まるが、そうした特徴を知らないと、楽しむはずのサーフィンで予想もしなかった事態に巻き込まれることもある。そしてもう一つ、鴨川の海は怖ろしい側面を持っている。それは、岩場や、テトラポットを積み上げた箇所が多いことだ。海に落ちたり波にのまれて引き込まれた釣り人が、上がろうと必死になって陸に近づき、これらのポイントに叩きつけられて命を落とすケースが後を絶たないという。

「もともと、こうした事故が起こりやすいのは海が荒れている時。レジャーで来る人はせっかく来たんだから、と海に出てしまうのでしょうが、地元の者がその様子を見ているとハラハラしますよ」庄司さんが言うと、「私たち救難所員も、そうした方々に今日は危ないから止めた方がいいと声をかけたりしていますが、それでも……」と岡崎さんは嘆いた。

救助長の坂本年壱さんはダイバーでもある。

救命索使用の責任者でもある、部長の庄司喜吉さん。



書記を務める徳山英樹さんは若手の一人。

釣りポイントとして人気の弁天島。周辺は岩が多く、テトラポットも高く積み上げられている。

事故現場の加茂川河口付近。取材当日も、大きな波が海から川へと押し寄せてきていた。

決死の救助活動、その顛末を振り返って

平成17年度に鴨川救難所の所員、渡邉良浩さんが名誉総裁表彰を受けた水難救助活動も、発端は釣り人が状態のよくない日にプレジャーボートで繰り出したことだった。

平成16年12月14日、海から加茂川へ入ろうとしたボートは、午前11時10分頃、河口付近で突然の横波を受けて転覆。釣り人2名がボートから投げ出された。

「その日、私は現場付近にある漁協の事務所で業務に就いていたのですが、知人が“鴨川の河口付近で船が転覆している”と駆け込んできたんです。それで、投げ出された方の救助に使用するため、仕事で使う浮き玉にひもをつけて現地に向かいました」その時は、その後の事態などまったく想定していなかったと、渡邉さんは訥々とした口調で語る。投げ出された方を救助しボートを元に戻す、程度の認識だったそうだ。しかし現場は、渡邉さんの予想をはるかに超えて深刻な状態だった。

「自分の命を大切にしてほしい」と語る渡邉良浩さん。

港付近では、この日も釣りを楽しむ人の姿が。

「橋の上から状態を確認して、これはもう一刻の猶予もないと思いました。救助のため、とりあえず川に入ったのですが、なにしろ冬ですから水温は低いし、河口から強い海の波が入ってきてなかなか遭難者のところにたどりつけない。ようやく遭難者の手をつかんだその時、水中にもう1名いることに気がつきました」

水中の遭難者は意識を失っていることがうかがえたので、すぐに人工呼吸をしなければならないと考えた渡邉さんは、ようやくの思いで転覆したボートの船底に2名を引き上げる。そして人工呼吸を始めるも、さらに押し寄せる横波に、渡邉さんと遭難者2名は再び水面へ投げ出された。

「もう一度船底に2名を助け上げなければ、とは考えたのですが、船が不安定で、このままでは思うように救助ができない。辺りを見回して、川の護岸に人が歩けるくらいのスペースがあることに気づきました。そこに遭難者を引き上げて、改めて人工呼吸をしようと思い立ちました」

まず1名を背負い、護岸へ保護したところに救急隊員が到着。残る1名は担架で引き上げられた。

渾身の救助活動。終わった時、渡邉さんは体力も尽き、自分の身体を水から引き上げるのが精一杯だったという。

当時を振り返って、渡邉さんは続けた。

「私は船舶操縦士の資格を持っていないのですが、毎日のように船を操って海に出る知人がたくさんいます。そうした方々から、海では日々、風や波の状態が変わるのだという話をよく聞かされます。そして、海と川との往来というのはそうした方々にとっても難しいことで、本当に緊張するそうです。河口は潮の満ち引きで深さがずいぶん変わるし、上流からの堆積物で部分的に浅くなっている箇所があったりもする。船をお持ちの方には、ぜひそういう状況も知っておいていただきたいですね」

名誉総裁表彰を受ける渡邉さんと、所長の松本さん。

名誉総裁表彰の記念写真

海岸線が長く、簡単に海にアクセスできる地形。多くの方が気軽に海へ出てしまう。

着実に活動を続けるため、二次災害を防ぐ

鴨川救難所員の平均年齢は42歳（平成21年7月現在）。65名中20代が15名、30代が12名と、若手の構成率が非常に高い、と徳山さんが教えて下さった。

「所員は全員が漁協の組合員。“助け合う”ことの大切さを誰もが理解していますから、“水難救助活動に参加してほしい”と声をかければ、みんな気持ちよく引き受けてくれます」と松本さんは微笑む。

漁業技術の継承は“先達の背中を見て覚える”のが伝統。「水難救助活動についても同様の面がありますね。先輩の活動の様子を見て、“こういう時はこう対応するんだ”と身体で覚えていく」と岡崎さんが言うと、庄司さんが続けた。「救命索の使い方など、“これだけは教えておかなければならない”というものについてはしっかり指導して、あとはともに実践経験を積むことで、目と身体でノウハウを伝えています」救命索の発射訓練に際しては、勝浦海上保安署の協力をいただいているんですよ、と喜代隆さんも話して下さった。

若手が多いことのほかに、鴨川救難所のもう一つの特徴、それは「定年制度」を設けていることだろう。「水難救助にはもちろん経験も必要ですが、なにしろ、遭難事故が起こるのは多くが荒天の時。そんな時に出動するのですから体力面も重要です。ですから、ある程度の年齢で、次世代にバトンタッチする。水難救助活動をこれからも着実に続けていくために、なによりも防がなければならないことは二次災害だと考えています」真摯な眼差しで所長は語った。

生活の糧を得るために、波の躍動感を満喫するために。鴨川の海へ出ていく多くの人々の命と安全を守っているのは、広く温かな心を持つ1人の女性と、力を合わせ活動を展開する、64名の海の男たちであった。

救命索発射の訓練シーン。

船舶火災の消火訓練シーン。

全国
地方救難所の
お膝元訪問

ニッポン港グルメ食遊記

救難所の皆さんが活動を展開する海は、多くの魚介類が育まれる場でもあります。そして、そこには「おらが海」だけの美味も……。今回は鴨川市漁業協同組合がブランド化を目指す「船上活きメ」をご紹介します。

鴨川市漁業協同組合　定置部漁労長の坂本年壱さん。地域の漁業の発展に向けて、さまざまな取り組みを展開する行動派。

「獲れたて」の美味しさを陸でも

船上活きメ

鴨川市漁業協同組合では、定置網漁で水揚げされた魚の鮮度を保つため、船上で血抜きして脊髄を破壊。獲れたての美味しさを持つ魚を「船上活きメ」の名で市場に送り出しています。

「もともとは、自分たちが楽しむために始めたもの。美味しいので他の方々にも食べていただいたら“これは旨い!”と反応がよく、より多くの方々に楽しんでいただけるよう、市場に出荷するようになりました」と話して下さったのは、鴨川市漁協の定置部で漁労長を務める坂本年壱さん。平成15年にサバでスタートした取り組みは着々と広がり、現在ではアジやイサキ、ワラサなども船上活きメを行うように。今年からは、魚に「船上活きメ」の表示ピンをつけて出荷しているとのこと。

「船上活きメは、なんといってもお刺身が一番。青魚が苦手な方にも、臭みがなくて美味しいと喜ばれます」と坂本さん。そこで記者は船上活きメのワラサを試食。ピンク色にしまった身を口に運ぶと、コリコリとした食感、そして濃厚な旨みが口いっぱいに!

「船上活きメの魚は、地元のお店でも料理に取り入れられています。鴨川で食べた魚が美味しかった、また食べたい、と多くの方が鴨川に足を運ぶきっかけをつくれたら、とてもうれしいですね」この美味しさを、皆さんもぜひ鴨川でご堪能ください!

市場に運ばれてきた「船上活きメ」のサバ。鮮度が保たれ、魚体が輝くよう。

「船上活きメ」のサバ。首を折って神経が切断されているので“鴨川の首折れサバ”とも呼ばれる。

ワラサにつけられた「船上活きメ」の表示ピン。

上が船上活きメ、下が通常の野メのワラサ。船上活きメのものは血が抜けて身がピンク色に。

刺身にした船上活きメ（左）と野メのワラサ。船上活きメは身がしまってさばきやすい、との声も。

船上活きメの刺身。生臭みがまったくなく、次々と箸がすすむ。

全国54,000人のボランティア活動を支えます

「青い羽根募金2010」活動レポート

効果的かつ安全に海難救助活動を行うためには、常日頃から組織的な訓練を行うとともに、ライフジャケットやロープなどの救助資機材の整備や、救助船の燃料などが必要になります。これらの供給に必要な資金は、全国的に行われる募金活動等によって集められています。日本水難救済会では、海上保安庁のご指導により昭和25年から「青い羽根募金」を開始し、周年で国民の皆様のご寄付をお願いしています。

前原国土交通大臣表敬訪問のひとこま。左から、坂本日本水難救済会理事長、相原会長、ミス日本「海の日」の鈴木亜美さん、前原大臣、鈴木海上保安庁長官

平成22年度青い羽根募金強調運動

日本水難救済会では、青い羽根募金活動を周年で展開していますが、7～8月の2ヶ月間は特に「青い羽根募金強調運動期間」と銘打ち、41ヶ所の都道府県地方水難救済会と協力して全国的な運動を展開しています。

7月15日には、この「青い羽根募金強調運動」の一環として、2010年度ミス日本「海の日」の鈴木亜美さんが、前原国土交通大臣を表敬訪問。青い羽根をつけていただき、募金運動への協力をお願いしました。

また、翌16日の閣議では、前原大臣のご提唱により、菅内閣総理大臣をはじめ閣僚の皆様に青い羽根をつけていただきました。

7月16日の閣議の様子

募金活動にご協力いただいた全国各地のみなさん

(社)琉球水難救済会の皆さん

7月25日に名護漁港構内で行われた「名護夏まつり」会場において、青い羽根募金を行いました。名護ミスさくら女王が今年も募金会場を訪れ、華を添えました。

大田区海洋少年団の皆さん

7月11日、東京都大田区のJR蒲田駅東口において、団員7名と指導者2名および団員の父母4名の合計13名が参加して青い羽根募金活動を実施。通行人に募金を呼びかけました。

静岡地区水難救済会沼津救難所の皆さん

「清水みなと祭り」に併せ、7月31日と8月1日に実施された巡視船「やしま」体験航海および一般公開において、「やしま」船内で青い羽根募金活動を行いました。2日間で延べ300名を超える方より募金にご協力いただきました。

東京海洋大学海王寮のみなさん

東京海洋大学海王寮寮生の有志の皆様が、7月11日、12の両日、東京メトロ豊洲駅および門前仲町駅付近の街頭において、青い羽根募金活動を行いました。

NPO長崎県水難救済会および長崎海洋少年団のみなさん

「海フェスタながさき～海の祭典2010長崎・五島列島～」の一環として、7月18日、長崎港において開催された巡視船「ちくぜん」一般公開、7月24日、五島市福江港における巡視船「でじま」一般公開および長崎港における「長崎帆船まつり」において、青い羽根募金活動を行いました。

青い羽根募金支援自動販売機の設置状況

日本水難救済会では、売上金の一部が青い羽根募金に還元される「青い羽根募金支援自動販売機」の設置を全国展開してきました。平成19年8月31日にNPO長崎県水難救済会が第1号機を設置して以来、全国の水難救済会の協力もあり、平成22年7月末現在の設置台数は398台に増加し、平成21年度においてその寄付金額は募金全体の約22%を占めています。

宮城県水難救済会

平成22年3月31日、宮城県塩釜市に所在する「株式会社くろしお」に支援自動販売機第1号機を設置。同日、関係者出席のもと除幕式が行われました。

茨城県水難救済会

平成22年4月18日、茨城県大洗磯浜町の「大洗町漁協かあちゃんの店」に支援自動販売機第1号機を設置しました。

静岡地区水難救済会

平成22年4月5日、静岡県湖西市新所所在の「スズキマリーナ浜名湖」に支援自動販売機第1号機を設置しました。

岡山県水難救済会

平成22年7月20日、岡山県玉野市所在の三井造船株式会社玉野事業所新社屋内の1·3·4階に、支援自動販売機60・61・62号機を設置しました。現在、岡山県の支援自動販売機設置台数は全国最多となっています。

広報・周知活動

「青い羽根募金」についてより多くの方に知っていただき、その活動が幅広く浸透するよう、各地でPR活動を展開しています。

募金啓発ポスターの掲示

平成22年度の「青い羽根募金」強調運動期間が始まった7月、都営地下鉄・東京地下鉄株式会社(東京メトロ)、株式会社ゆりかもめ、江ノ島電鉄株式会社、小田急電鉄株式会社、京浜急行株式会社、相模鉄道株式会社、東武鉄道株式会社および成田空港ビルディング株式会社のご協力を得て、各駅の構内および空港ロビー等に阪神タイガースの城島健司選手を起用した募金啓発ポスターを掲示していただきました。

モニュメントに幟旗と青い羽根を装着

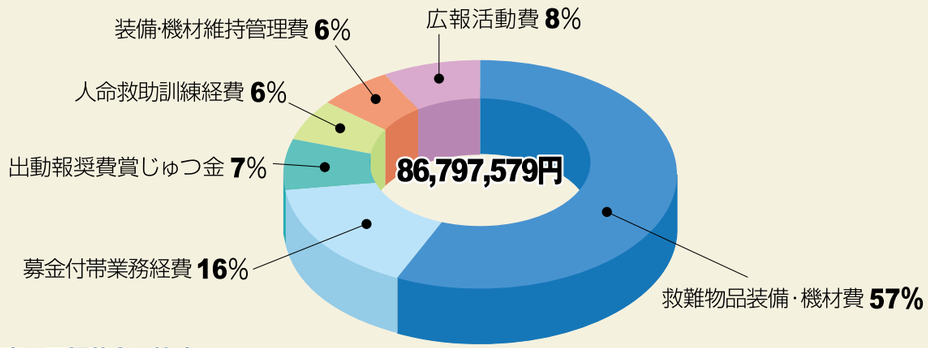
7月30日、第三管区海上保安本部救難課および手芸ボランティアグループ「あじさい」のご協力をいただき、JR浜松町駅山手線外回りホームの「小便小僧」に青い羽根募金の幟旗と青い羽根を装着。8月25日まで青い羽根募金のPRを行いました。

「あじさい」では、昭和61年から「小便小僧」に対し季節にふさわしい衣装の制作と衣替えを実施。その衣装をまとった「小便小僧」は、現在、駅の名物となっています。

平成21年度 青い羽根募金の使用実績

日本水難救済会および地方水難救済会は、平成21年度も、海上保安庁、防衛省等中央省庁、都道府県、企業、団体からご支援をいただくとともに海洋少年団等からも募金活動にご協力をいただき、募金総額は前年度より11,902,008円増となる86,797,579円となりました。

また、日本水難救済会の青い羽根募金口座に各企業、防衛省の陸上、海上および航空自衛隊各部隊、個人の方々および東京海洋大学学生寮寮生、小、中学校および高校生の皆さんの募金活動による多額の寄付がありました。募金をいただいた皆様にお礼申し上げます。



■青い羽根募金の使途

人命救助訓練

水上オートバイ

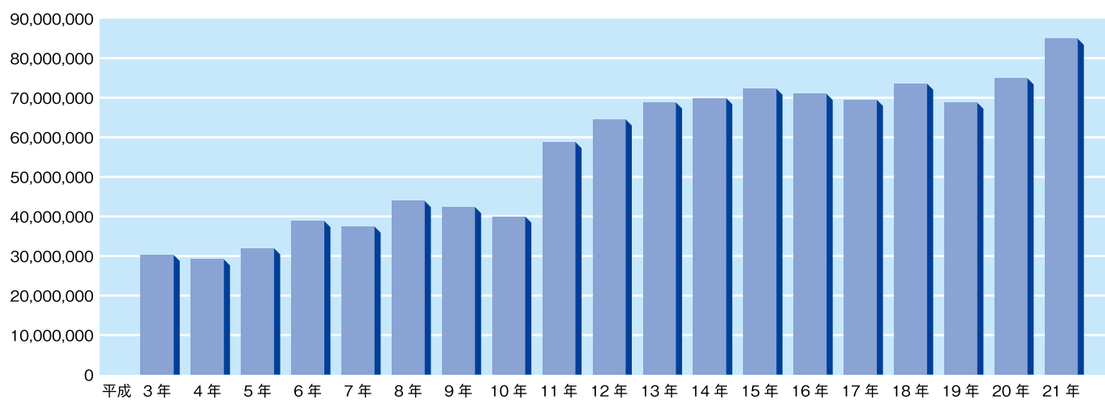
救急セット

AED

救難機材

消防・排水ポンプ

■募金実績の推移(平成3年～21年度)単位：千円



MRJ
歴史探訪
シリーズ

海事関係者からの奉納物

ボランティア精神の源を訪ねて…③

**海洋国日本で、古くから受け継がれてきた水難救助の精神。
ここでは、日本における水難救済の歴史を、
さまざまな角度から検証してまいります。**

◆ はじめに ◆

十辺舎一九の『続膝栗毛』には、金刀比羅宮の特徴的な奉納物として「髻の絵馬」が紹介されています。これは毛髪を束ねた「髻」を木額に括り付けた物で、境内の至る所で見かけられたと記されています。

さてこの「髻」ですが、同時代の随筆集『塩尻』に「海上で遭難した時に金毘羅大権現の名を唱え、毛髪を切ったり、あるいは持ち物を海中に投ずれば難をまぬかれる」と記されています。おそらく船中、危機に瀕した方々が、窮地を脱した御礼に自らの毛髪を奉納したのだと思われます。ただ、残念な事に「髻の絵馬」は現存しません。毛髪が傷みやすく脆いためです。とはいえ「髻の絵馬」は、当時の金毘羅信仰を知る上で非常に重要な奉納物です。

◆ 奉納物の歴史 ◆

金刀比羅宮に伝わる諸史料・諸記録は、幕末から昭和初年にかけて整理調査が行われ『金刀比羅宮史料』としてまとめられました。これは90巻に及ぶ膨大なもので、奉納物関連の史料も収められています。本稿では同史料をもとに江戸時代の奉納物、特に海にまつわる奉納物について紹介します。

◆ 石灯籠 ◆

海事関係者による奉納物の初見は、正徳5年(1715)です。塩飽(しわく)牛島の船頭丸尾家によって石燈籠が奉納されました。塩飽諸島は瀬戸内の海運の要衝で、寛文12年(1672)に西回り航路が開かれると、その運航を一手に担いました。

一説に、こんぴらさんが"海の神さま"として広く認知されるようになったのは、塩飽の廻船が金毘羅大権現の旗を掲げて諸国を巡ったことに由来するといわれています。

石燈籠の奉納は、宝暦7（1757)、越前敦賀(福井県敦賀市)の綱干屋仁兵衛、宝暦11年(1761)、大阪の小堀屋庄左衛門と続き、幕末の文久2（1862)尾張中須村(愛知県知多半島南端)の天野六左衛門に至るまで十数回続きます。

越前敦賀講奉納の燈籠(1)(左から2番目)

越前敦賀講奉納の燈籠(2)(正面から撮影)

「捕鯨図」絵馬。銛がうなり飛ぶ音、勢子のときの声、鯨の咆哮が聞こえるかのような大迫力

◆ 絵馬 ◆

前Vol.102 No.1号にて「海難絵馬」を紹介いたしましたが、海事関係者からの絵馬の奉納もあります。享保9年(1724)、同じく塩飽丸尾家から「鯛釣り戎」の絵馬が奉納されました。四代目五左ヱ門正次の時です。また讃岐多度津(香川県多度津町)廻船組合からは「翁図」の絵馬が、寛政4年(1792)には筑前(福岡県西部)の円通丸千蔵、栄久丸米蔵等による「祷海神図」（英一圭筆)の絵馬の奉納がありました。安政2年(1855)には土佐津呂(高知県清水市)の鯨方から「捕鯨図」の絵馬が奉納されました。

【次号に続きます】

越前敦賀講奉納の燈籠(3)（竿の右面より。「越前敦賀講中講本綱干屋仁兵衛」と刻まれている)

越前敦賀講奉納の燈籠(4)(竿の左面より)

◆ 執筆者 ◆

金刀比羅宮禰宜
琴陵　泰裕氏

マリンレスキュー MONOギャラリー

知識は時に、救助活動の成否を左右します。だからこそ知っておきたい、資器材の種類や現状。
今回は海上保安庁の特殊救難基地が保有する船上火災発生時に使用される「火災対応器材」および「検知器材」をご紹介するとともに、その取り扱いや消火の訓練シーンをお伝えします。

器材紹介

赤外線直視装置

煙などで視界の悪い場所でも、熱を画像に代えることで要救助者や火点を見つけることができます。

ガス検知器(小型)

酸素、硫化水素、一酸化炭素、可燃性ガスの濃度等を測定することができます。

接触温度計

固形・液体物質の温度を測ることができます。

ガス検知器

酸素、硫化水素、一酸化炭素、可燃性ガスの濃度等を測定することができます。

検知器

空中に浮遊している有害物質などの量を量ることができます。

空気呼吸器

酸素がない場所や、有害物質が充満している空間でも、呼吸することができます。

消火訓練

消火訓練①

炎上している室内への進入準備をしています。厳しい条件下で訓練を行うため、あえて空気呼吸器は装着していません。

消火訓練②

グレーチングの下に漏れた油が燃えています。炎の高さは時に、隊員の背よりも高くなることもあります。

消火訓練③

消火後、目視や赤外線直視装置を使用して、鎮火確認をします。壁や天井の温度が高く、放出した水が、水蒸気と変化したために、視界が悪くなっています。

器材の取り扱い

検知器を使用して、物質の濃度を測定しています。
隊員の着ている防護衣は、外の気体が中に入らないようになっています。

【参考】
完全に外界と遮断しているため、防護衣の中は非常に暑くなり、訓練後は体重が2～3kg減少することもあります。

要救助者の搬送訓練中です。
煙などで視界が確保できない状況を再現するために、面体の前にカバーをかけています。

防火衣と空気呼吸器を装着して、ヘリコプターから船に降下中です。

【参考】
背中の空気呼吸器は重いため、空中では体勢を崩さないように注意が必要です。

防火衣と空気呼吸器を装着しての進入状況です。また、ガス検知器、防爆ライト、進入用ロープ、赤外線直視装置を携行しています。

【参考】
このような器材一式を携行すると、その合計重量は30kgを超えます。

新設救難所の紹介

海難救助活動の拠点となる新たな救難所が新設されています。今回は3カ所の新設救難所をご紹介します。なお紹介文は、それぞれの救済会および救難所からご提供いただきました。

静岡地区水難救済会

焼津救難所

平成22年4月17日設立　　所長以下8名

静岡県は砂浜からリアス式海岸まで変化に富む地形の、約506kmに及ぶ海岸線を有します。県内には5カ所の救難所が設置され、水難事故の際の救助に当たっています。

今回新設された焼津救難所は駿河湾の西部に位置し、県内6番目の救難所として平成22年4月17日に開設、6月13日には地元関係部署から30名を招いて開所式が行われました。救難所長には地元で創業30年となる(有)焼津マリン代表小池正美氏が任命され、周辺のボート愛好家 7名とともに、水難事故撲滅のため救難訓練に取り組んでいます。今後は本会および関係団体が一丸となり、水難事故防止、ライフジャケットの常時着用を推進していきます。

福井県水難救済会

南越前町水難救難所

平成21年12月21日設立　　所長以下28名

福井県南越前町の海岸部は、標高差200～300m断層と呼ばれる断層海岸です。「越前加賀海岸国定公園」にも指定され、冬には海岸線一帯に越前水仙の可憐で清楚な花が咲き誇ります。この風光明媚な光景と越前ガニ、また海洋レジャーなどを目的に、このエリアには県内外から年間約32万人もの観光客が訪れます。

しかし、水難事故発生時の救助体制が確立されていなかったことから、南越前町が中心となり県水難救済会で7番目となる救難所を設置。所長に南越前町長を迎え、河野村漁業協同組合、地元行政の全面的な支援協力を得てスタートしました。

香川県水難救済会

土庄中央救難所

平成22年1月7日設立　　所長以下69名

世界で一番狭い海峡、土淵海峡のある小豆島土庄町に、土庄中央救難所が設置されました。小豆島にはすでに2カ所の救難所がありますが、今回の新救難所設置により、小豆島西部海域の豊島周辺や小豆島北部海域における救助体制が強化されました。

同救難所の新設については、土庄町役場庁舎への「青い羽根募金支援自動販売機」の設置など本会の活動に理解を示されている土庄町長からの声かけもあり、香川県の海の安全・安心のため、当該海域を活動の場とする土庄中央漁業協同組合に活動していただけることとなりました。

海難救助訓練

平成22年度の海難救助訓練指定数は、「救助訓練実施要領平成22年度版」で各県水難救済会別に合計で300が指定されました。しかし、予算の範囲内であれば指定数を超えて訓練を行っても助成金を交付することが可能ですので、できるだけ多く訓練を行うようお願いします。

訓練の実施要領としては、毎年配布する当該年度版の訓練実施要領のほか、「救難所員訓練必携」と「海難救助作業マニュアル」を各救難所に配布しておりますのでご活用下さい。

なお、平成21年度に行われた訓練の実績は、全国36の地方水難救済会において、延べ347の救難所、支所から6,085人の救難所員が参加して実地訓練が行われました。

また、新潟市、富山市、松江市および徳島市において26救難所から76人の所員が参加して指導者研修が行われました。

(社)北海道漁船海難防止・水難救済センター

平成22年4月23日、せたな町大成区久遠の久遠漁港岸壁において、久遠救難所合同訓練大会を実施。太田支所・上浦支所・久遠支所の救難所員38名を含む48名が参加しました。基本動作の確認を行った後、もやい銃による孤立者救助、ガソリンポンプを使用した火災船救助、人命緊急蘇生法などの訓練を行いました。動作が的確に行われ、良好な訓練が実施できました。

福島県水難救済会

平成22年2月21日、請戸救難所では相馬双葉漁業協同組合請戸支所事務所前にて訓練と出初式を実施。救難所員48名を含む50名が参加しました。訓練では、副所長の号令により基本的な動作や整列点検、救難器具類の取り扱い練習などを行いました。その後、苕野神社にて、海上安全を祈願しての出初式を挙行しました。

NPO神奈川県水難救済会

平成22年1月7日、横須賀市の走水港において、11救難所が参加する合同訓練を実施。来賓等も含め、約430名が集まりました。救命索発射銃の操作、消火などの訓練のほか、海上保安庁横須賀海上保安部指導のもとでの海上転落者の吊上げ救助、横須賀市消防局浦救急隊参加の指導による心肺蘇生法などの訓練も行いました。

救難所だより

伊豆地区水難救済会

平成22年2月3日、下田港外が岡桟橋及び睢鳩（みさご）島付近の海域で訓練を実施。下田救難所の所員20名を含む80名が参加しました。

レジャーダイバーが潜水中に事故に遭ったという想定で、基礎潜水訓練を皮切りに、実働訓練として潜水障害突破、潜水捜索を行いました。

今回の訓練は下田救難所としてダイバーと連携した初めての試みでしたが、下田海上保安部や、清水海上保安部巡視船おきつ潜水士ほかの職員の方による指導などにより、水難救助技術の向上と各機関や官民相互の緊密な連携体制を構築するという目的を達成することができました。事故防止意識もさらに高まり、有意義な訓練となりました。

岡山県水難救済会

平成22年6月26日、岡山県玉野市渋川海水浴場にて、岡山ライフセービングクラブ救難所・玉野市消防本部・玉野海上保安部が合同で沿岸海難救助訓練を実施。参加者15名のうち、救難所員は6名でした。3者連携のもと、渋川海水浴場で発生した溺者事故を想定して、情報伝達や溺者救助と搬送、AEDを使用した心肺蘇生法について訓練を行いました。

NPO長崎県水難救済会

平成22年5月26日、「『自助・共助』地域に広めよう防災の輪」をテーマに、長崎市と各防災機関が参加する長崎市総合防災訓練が行われました。参加者数は約1,000名。

水難救済会においても事前に入念な打合せを行って他団体と役割を分担し、事故のないよう十分に注意を行った上で訓練を展開しました。訓練内容は、海上偵察および救助、大型救助船の現場進出、漂流船曳航および漂流者捜索、長距離送水および放水など。参加機関の連携が深まるという、良い成果を収めることができました。

（社）琉球水難救済会

平成22年6月18日、恩納・読谷地区海難救助連絡協議会が主催するマリンレジャー事故対策訓練に参加するとともに、9救難所が集まり合同訓練を行いました。

海難救助連絡協議会は、第十一管区海上保安本部、リゾートホテル、漁協、海洋レジャー関係者、警察・消防機関などが加入する組織です。当会では日本ライフセービング協会沖縄支部から講師の派遣を受け、第十一管区海上保安本部等の指導のもと、救助技術の向上を目指して訓練を実施。118番による事故通報や水上オートバイを活用した漂流者救助、心肺蘇生法およびAED取扱いなどについて訓練を行いました。

海難救助活動レポート

平成22年の1月～6月までの海難救助出動件数は160件で、144人の人命救助と67隻の船舶救助に関わりました。

全国の統計でみると、海難救助に出動した救難所員は延べ2,154人、救助船は延べ853隻、協力船は延べ165隻でした。これを昨年度の同じ時期と比較すると、出動件数で33件減少し、救助人命は20人の減となりました。出動した救助船は711隻の減で、出動救助員は2,967人少なくなっています。

天候が急変する中、連係プレーで人命救助

NPO秋田県水難救済会戸賀救難所

戸賀港を出漁した船外機船が、平成22年4月13日午前6時頃、湾内で強風にあおられて転覆。乗員1名は転落したが船底に這い上がり、避難した。たまたま湾付近の路上を自家用車で走行していた戸賀救難所員が海上で救助を求める遭難者を発見、ただちに他の救難所員に応援を求めるとともに、自己所有の漁船で現場に急行。天候が急変する中、連携しながら迅速に救助活動を行い、事故発生から約25分後に遭難者を救助した。

秋田県水難救済会
戸賀救難所

江畑　政紀さん
敦賀　強さん

航行中に事故を発見、救助活動を展開

新潟県水難救済会出雲崎救難所

平成22年5月5日午前6時20分頃、漁場に向かって航行中の漁船Sは浅瀬岩礁に船体が当たり、乗員が海上に投げ出された。陸上の発見者により110番通報があり、与板警察署より出雲崎漁協支所長および出雲崎救難所事務局に連絡が入った。一方、救難所員2名はそれぞれの船で漁場に向かって航行中、旋回している漁船Sに遭遇、さらに遭難者を発見し、救助。遭難者の搬送と、漁船Sの曳航を行った。

新潟県水難救済会
出雲崎救難所

佐藤　幸一郎さん
近藤　光雄さん

荒天の中、遭難したシーカヤックの乗組員を救出

千葉県水難救済会金田救難所

救助に向かう金協丸

平成22年5月24日午後7時25分頃、3艇のシーカヤックが遭難しているとの連絡が木更津海上保安署より金田救難所に入った。所長は至急所員に招集をかけ、午後7時40分、集まった所員に救助出動を指示して救助船の第18金協丸に乗船、遭難現場に向かった。午後8時3分に現場に到着したものの、荒天の中での船体救出が困難だったため、乗組員3名を救出し、中島漁港に午後8時30分に帰港した。翌日、天候が回復したことにより午前6時30分に船艇の救出作業を開始、午前8時45分に3艇の救出を終了した。

千葉県水難救済会金田救難所

所長　金綱　一衛さん
大村　竹男さん　篠田　和明さん
本多　安雄さん　勝畑　忠一さん
江尻　曠之さん　浅野　政男さん
石渡　房雄さん　緑川　太平さん
錦織　正行さん

強風の中、座礁した船から乗員を救助

和歌山県水難救済会紀南西部救難所

平成22年4月3日午前9時30分頃、釣りのため畠島付近の海域にいたプレジャーボートが、風に圧流され暗礁に乗り上げた。自力離礁ができず乗員2名が救助を求めていたところ、付近を航行していた紀南西部救難所員が気づき、現場に赴いた。現場は多数の暗礁が存在し、さらに強風のため自船も座礁する可能性がある中、乗員を救助。また、プレジャーボートが流されないよう、岩場に固定した。プレジャーボートは乗員搬送後に引き下ろされ、漁港まで曳航された。

和歌山県水難救済会
紀南西部救難所

岩本　剛さん

(社)北海道漁船海難防止・水難救済センター虻田救難所

平成22年3月15日午前5時頃、ホタテの荷上げ作業中の漁船H丸はユニック荷重でバランスを崩し、転覆。乗員は自力で船底に這い上がり、救助を求めた。付近で操業中であった虻田救難所員が転覆に気づいて駆け付け、乗員を救助し帰港。その後転覆船の救助を行うため虻田救難所員が出動し、ホタテ養殖施設から転覆船を引き出し起こし作業を行おうとした。しかし船体の大部分が浸水したため、いったん大磯漁港付近に曳航し、漁港工事に携わっていた企業に協力を求めた。潜水夫によりベルト掛けした後、企業の基軸船クレーンにて吊り上げ、ポンプで排水し、虻田漁港へ曳航、転覆船を救助した。

岩手県水難救済会宮古救難所

平成22年5月10日午前0時30分頃、昆布の養殖施設で、Aは刈り取り作業中、桁送り機に左腕をはさまれ、ロープを切り離したものの反動で海中に転落。ケガのため船に這い上がることができず、船外機につかまり約1時間漂流。その後、同業者が遭難者を発見し、近くで操業していた宮古救難所員に呼びかけ、救助を行った。しかし遭難者が意識を失っていたため、漁協に通報し救急車を手配。遭難者を乗せて音部港に向かい、岸壁付近にいた救難所員等の協力を得て岸に上げ、病院に搬送した。遭難者は病院で意識を取り戻し、左腕の骨折等も免れた。

宮城県水難救済会雄勝救難所

平成22年2月1日午前11時35分頃、船越湾において漁船が炎上しているとの情報を雄勝救難所が入手。救難所員を発動させるとともに、石巻海上保安署に通報した。炎上した漁船D丸は、乗員1名により漁のため操業中だった。現場に到着した救難所員は乗員を救助するとともに、曳航索を取って炎上船を広い海域に移動し化学消火弾を投てき、炎の勢いが弱まると、救助船に搭載していたポンプにより消火を実施した。その後、鎮火した事故船を船越漁港に曳航した。

伊豆地区水難救済会伊東救難所

平成22年4月17日午後1時50分頃、八幡野港で磯釣りをしていたBは高波にさらわれ、海中に転落した。付近にいた釣り人がBを発見、119番通報するとともに、ともに近くにいたいとう漁協の組合員に救助を依頼した。一方、八幡野港にいた伊東救難所員は「釣り人が海中に落ちた」との知らせを受けただちに現場海域に到着、近くにいた釣具屋経営者と連携して遭難者をカギ竿を使って揚収、八幡野港に搬送した。

岡山県水難救済会スズキマリーナ神島救難所

平成22年5月31日午前9時20分頃、水島海上保安部から、笠岡市神島西側海域でプレジャーボートNが機関故障のため救助を求めているとの通報を受けた。救助艇により救難所員2名が現場に向かい、故障船の調査を行った結果、クラッチを止める消耗品のキャップが破損して外れ、クラッチの切換え不良により前後進不能となって航行できなくなったことが判明。応急処理を施し、救難所員が上乗りし救助艇の伴走警戒により故障船の自力航行でスズキマリーナへ回航させて救助を完了した。

山口県水難救済会久原救難所

遭難者Cは、平成22年6月12日に遊走目的で仲間4名とともにシーカヤックで出艇、手長島を航過した付近から南よりの風が強くなって航行が困難となり、午後5時頃風浪の影響により転覆。船体を復旧させることができず、漂流することとなった。行方不明になっていることに気づいた仲間が海上保安庁に救助を求め、仙崎海上保安部の要請により久原救難所から救難所員が出動。午後18時35分頃遭難者を救助し、シーカヤックを曳船のうえ久原港に搬送した。

大分県水難救済会佐伯救難所

平成22年3月21日午前6時40分頃、海上保安署より佐伯湾大入島トウドウ鼻沖でN丸が転覆しているとの連絡が、佐伯救難所に入った。所長はただちに救難体制を整え、午前6時55分、救助船の仁盛丸と豊栄丸、救難所員4名を現場に出動させた。

午前7時34分に転覆したN丸を発見し、乗員1名を救助。海上保安署と協力して転覆船をいったん鶴谷岸壁に曳航し、船体を復元。その後豊栄丸で曳航し、寿マリーナへ上架した。

鹿児島県水難救済会南大隅町佐多救難所

平成22年2月28日午前9時40分頃、田尻港より瀬渡し船で渡った釣り客が行方不明との連絡があり、9時50分、瀬渡し船「T丸」の船長より、捜索の要請を南大隅町佐多救難所が受けた。

救助船9隻が出動し灯台下からビロウ島周辺を捜索、午前11時25分に佐多岬灯台約1km付近で救助船いづみ丸が遭難者を発見し、収容。病院へ搬送した。

遭難者は救命胴衣を着けていたため、命に別条はなかった。

洋上救急 昭和60年10月制度発足以来の発動件数が累積700件に達しました。

700件達成までの間に、全国の協力医療機関(現在145病院)から1,317名の医師・看護師が派遣され、洋上で発生した傷病者728人に対して応急医療を行いました。

また、海上保安庁から503隻の巡視船艇、882機の航空機および440名の特殊救難隊員等、自衛隊から212機の航空機が出動し、対応しました。

■累積700件目の洋上救急事例

平成22年7月18日05：50発生

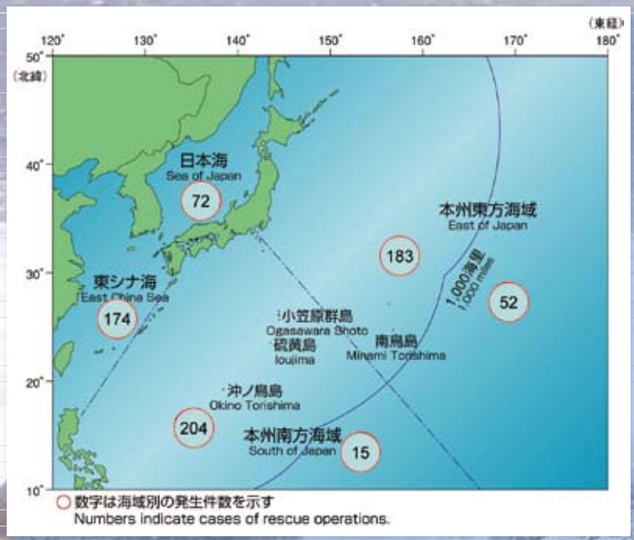
台湾からの要請に、海上保安庁・自衛隊と連携して対応

台湾RCC（救難調整本部)より海上保安庁に対し、小笠原諸島父島の南西約168km付近を航行する台湾トロール漁船「SHUN HUNG」の機関長(男性・50歳)の救助について要請があった。同機関長は15日より下血があり、18日に吐血、台湾の医療機関より至急医療機関への搬送が必要との助言があったことから、船主より洋上救急センターへ洋上救急の依頼があったものである。

第三管区海上保安本部(横浜市)では洋上救急センターと調整のうえ、羽田航空基地より医師2名同乗のジェット機を硫黄島に向かわせるとともに、海上自衛隊に災害派遣を要請。ヘリコプターによる該船からの患者の吊り上げと硫黄島までの搬送を依頼した。

海上自衛隊ヘリコプターは18日午後1時18分に患者を吊り上げ揚収、硫黄島で羽田航空基地所属の航空機に患者を引き継いだ。航空機は午後4時40分羽田航空基地に到着。患者は救急車で日本医科大学付属病院に搬送された。診察の結果、患者は胃潰瘍と診断された。

■洋上救急発生海域図(700件)



出動700件目を担当した医師にインタビュー

●出動の状況を教えて下さい。

「乗員が血を吐いた。詳細な情報は入手できない」とのことでした。そのため、胃腸潰瘍や食道静脈瘤などの疾患を想定し、通常の携行資器材に加え止血剤、注射用胃薬(抗潰瘍薬)、SBチューブ(胃・食道圧迫バルーン)を携行して出動しました。

●救急活動はどのように行われましたか？

患者を揚収したヘリにも医師(医官)が搭乗しており、「血圧、脈拍などは安定している」との情報をいただきました。おかげで引き継ぎ後の機内では慌てることなく治療ができ、点滴で静脈注射用の胃薬を投与しました。

●今回の体験を踏まえ、ご意見やご要望をお願いします。

患者の容体について、もう少し詳しい情報を提供していただけるといいなと感じました。また、携行資器材についても情報共有ができるといいと思います。

日本医科大学付属病院　高度救命救急センター
松本　学さん　松井　亮平さん

平成22年1月5日11：36発生

該船の航行に合わせて救急活動を展開

オーストラリアから大阪に向けて航行中、以前からある背中のできものから膿が出て、全身に広がり痛みが出てきたと操機手が訴えた。医療機関の助言を受け、船主から洋上救急の要請。該船が沖縄本島から離れていたため、対応可能な距離まで近づくよう指示が出された。翌6日午前8時20分、ヘリMH960に医師1名と機動救難士2名が同乗し、那覇航空基地を出発。飛行距離の関係により、看護師は待機となった。該船と会合の上、午前9時29分、該船から患者を吊り上げ揚収し、那覇航空基地に帰投。午前10時40分に患者を救急車に引き継いだ。

【発生位置】沖縄県喜屋武埼灯台の南南東約320海里　北緯15度54分　東経130度17分
【傷 病 者】男性・35歳　操機手(傷病名)敗血症
【出動医療機関、医師等】浦添総合病院　医師：1名　看護師：1名
【出動勢力】海上保安庁那覇航空基地　飛行機MA721　ヘリMH960　機動救難士2名

患者の急変や該船までの距離。柔軟な対応が求められた救急活動

2009年12月20日に水難救済会と当院で洋上救急業務の協力に関する協定が締結した矢先、偶然にも洋上救急業務マニュアル作成直後に早速要請があった。6日午前10時30分に那覇基地発予定であったが、患者が急変したため急いで来てほしいとのこと。船の距離が離れていたため航空自衛隊の機体と海上保安庁のヘリコプターとどちらで向かうかを検討。結局、予定通り海上保安庁のヘリで行くことになったが、飛行距離が当初の予定より延びるため燃料面の問題もあり、医師のみの派遣となった。該船を発見し、極限まで近付いたヘリから2名の機動救難士がワイヤー 1本で甲板に降りていった。5分ほどで準備ができ、患者とともに機動救難士を機内に収容。患者の意識は混濁し呼吸は荒く、臀部は化膿して、最初の印象は重症だった。酸素投与と輸液ルートを確保し、鎮痛剤を投与してモニターを見守った。機長はもちろん、クルーの操縦テクニック、機動救難士の迅速な救助活動がなければ、このミッションは成り立たなかったと思う。この経験を活かし、今後も洋上救急に貢献していきたい。

洋上救急に出動した医師　福井 英人さん

平成22年2月23日12：30

巡視船を拠点に、脳梗塞患者の救急活動を行う

漁労長が手足のしびれを訴え、またろれつが回らず自力歩行が困難となった。医療機関に助言を受けて、船主から洋上救急の要請。巡視船「ざおう」が発動した。その後、ヘリMH906に医師・看護師各1名が同乗し、「ざおう」に向けて仙台航空基地を出発し、着船。翌朝ヘリMH574に医師等が同乗し「ざおう」を出発、該船と会合し、患者を機内揚収した。MH574は一度「ざおう」に戻った後、患者と医師等を同乗させ仙台航空基地に向かい、到着後、患者を救急車に引き継いだ。

【発生位置】宮城県金華山灯台の東南東約510海里　北緯33度25分　東経150度34分
【傷 病 者】男性・57歳漁労長(傷病名)脳梗塞
【出動医療機関、医師等】仙台医療センター　医師：1名　看護師：1名
【出動勢力】海上保安庁宮城海上保安部PHL「ざおう」 ヘリMH574　降下員2名、仙台航空基地ヘリMH906

平成22年5月17日11：14

海上自衛隊に災害派遣を要請し、患者を救命へ

機関員が船内で転倒し、意識朦朧となっていると、船主により洋上救急の要請が入った。緊急を要すると判断し、午前11時44分、海上自衛隊に災害派遣を要請。午後0時41分、ヘリUH60Jに医師・看護師各1名が同乗し、谷山ヘリポートを出発。午後1時30分、該船と会合し救助を開始した。午後1時57分、患者を吊り上げUH60J機内に揚収、谷山ヘリポートに向かう。午後2次57分谷山ヘリポートに到着し、患者を救急車に引き継いだ。

【発生位置】鹿児島県三島村黒島の西約95海里　北緯30度06分　東経128度27分
【傷 病 者】男性・49歳機関員(傷病名)脳挫傷
【出動医療機関、医師等】鹿児島徳洲会病院　医師:1名　看護師：1名
【出動勢力】海上自衛隊　ヘリUH60J

RESCUE REPORT

平成22年5月18日07：30

飛行艇による洋上救急を展開

通信長の顔色が蒼白になりろれつも回らず、歩けないという症状を訴えたため、医療機関から指示を受け、船主から洋上救急の要請。海上自衛隊の飛行艇US2に医師2名と看護師1名が同乗し厚木基地を出発し、犬吠埼に向かった。犬吠埼の沖合約550kmに着水し患者を収容、厚木基地に戻り、患者を救急車に引き継いだ。

【発生位置】千葉県犬吠埼の東約340海里　北緯35度16分　東経147度38分
【傷病者】男性・51歳通信長(傷病名)脳梗塞
【出動医療機関、医師等】東海大学医学部付属病院　医師：2名　看護師：1名
【出動勢力】海上保安庁宮城海上保安部PHL「ざおう」PL「くりこま」、海上自衛隊飛行艇US2飛行機P3-C

■平成22年 その他の洋上救急の状況(平成22年8月末現在)

発生日時	発生位置	傷病者	状　況
平成22年3月11日(09：05)	沖縄県喜屋武埼の南東約143海里 北緯22度33分 東経130度36分	男　性・57歳船長(傷病名)心臓病	インドネシアから鹿児島県枕崎に向け航行中、船長が心臓の痛みと呼吸苦を訴えた。医療機関に指示を求めたところ、代理店より洋上救急の要請。航空自衛隊へ災害派遣を要請し、ヘリUH60Jに医師･看護師各1名が同乗して那覇空港を出発。該船から患者を吊り上げ機内に揚収、那覇空港に向かい、患者を救急車に引き継いだ。
平成22年5月20日(14：45)	宮城県金華山灯台の東約943海里 北緯38度47分 東経161度36分	男性・27歳研修生(傷病名)急性腸炎	研修生が右下腹部の痛みを訴えた。医療機関より早急に医師の診察が必要との助言を受けたため、船主が洋上救急を要請。巡視船「くりこま」に医師・看護師各1名が乗船し出港、途中巡視船「ざおう」に乗り換え、搭載機ヘリMH575で該船へ。患者を吊り上げ揚収し、一度「ざおう」に戻ってから石巻港雲雀野ヘリポートに向かい、患者を病院へ搬送した。
平成22年5月28日(07：20)	沖縄県喜屋武埼の南南西約57海里 北緯25度22分 東経127度12.2分	男　性・49歳船員(傷病名)脳出血	乗組員が投縄中にけいれんを起こした。医療機関より早急に医療機関に搬送する必要があると指示を受け、船主が洋上救急を要請。ヘリMH961に医師・看護師各1名と機動救難士2名が同乗し、那覇空港を出発。該船から患者を吊り上げ揚収した。那覇空港に戻り、患者を救急車に引き継いだ。患者は病院にて死亡が確認された。
平成22年6月10日(21：16)	宮城県金華山灯台の東南東約915海里　北緯33度18分東経159度58分	男 性・49歳甲板員(傷病名)腹直筋挫傷及び血腫	甲板員が操業中腹痛を訴えた。医療機関より指示を受けた船主が洋上救急を要請。巡視船「えりも」が発動した。巡視船「つがる」に医師1名が同乗し、出港。ヘリMH564は「えりも」から潜水士2名を吊り上げ、該船に降下、患者を揚収し、「つがる」に向かった。その後ヘリMH564は「つがる」から函館航空基地に到着、患者と医師は病院に運ばれた。
平成22年6月27日(09：10)	沖縄県久米島の南西 約58海里　北緯26度19分東経125度41分	男 性・51歳機関長(傷病名)大動脈解離	機関長が航行中体調を崩し、意識もうろう、自力歩行不能となった。医療機関より指示を受けた船主が洋上救急を要請。飛行機LAJ570が救急支援のため先行して出発した。その後、ヘリMH960に医師・看護師各1名と機動救難士2名が同乗し、該船へ向かった。ヘリは該船から患者を吊り上げ揚収し、那覇航空基地へ帰投。患者を救急車へ引き継いだ。

■洋上救急の発生状況(昭和60年度～平成21年度)(平成22年3月31日現在)

年度 / 項目		昭和60年～63年	平成 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	計
発生件数		98	42	36	35	42	30	29	27	16	31	30	32	23	18	24	23	37	31	16	26	21	23	690
傷病者		101	47	36	36	45	35	29	28	16	31	30	32	23	18	24	28	41	31	16	27	21	23	718
医師等		193	71	63	65	77	60	54	53	33	53	52	60	50	36	46	50	68	54	31	51	37	42	1,299
(看護師の再掲)		71	24	22	26	28	21	19	22	10	17	16	23	17	13	14	15	12	17	12	17	9	(15)	(440)
海上保安庁	巡視船	98	34	30	24	25	16	13	24	11	23	11	23	16	13	11	14	28	19	16	19	11	15	494
	航空機	120	55	52	47	65	34	29	35	18	35	30	21	24	16	34	30	60	43	25	31	32	38	874
	特救隊等	29	18	20	14	20	22	18	17	15	12	20	12	10	11	10	18	25	25	17	26	32	39	430
自衛隊機		23	12	2	5	**	4	7	6	4	7	10	19	16	10	13	13	10	12	3	20	7	4	207
民間船		1	**	**	**	1	**	1	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	1	4

ボランティアスピリット継承のために

普及活動レポート

日本水難救済会では、海事思想や水難救済会ボランタリー思想を啓蒙することにより、将来の後継者になってもらえるよう、海上保安官やライフセーバーの方々を講師に招き、青少年を対象とした水難救済ボランティア教室を全国で展開しています。

平成22年度 若者の水難救済ボランティア教室

「若者の水難救済ボランティア教室」は平成13年度から始まった事業で、小中学生や高校生等の若者に海の知識を深めてもらうとともに海に親しむ機会を与え、実地体験を通して救命技術を習得してもらうことを目的としています。

さらに、海での安全意識の向上を図るとともに水難救済ボランタリー思想を啓蒙しています。

今年度も国土交通省・海上保安庁・消防庁から後援を受け、各地で開催された模様を紹介します。

■佐賀県水難救済会

平成22年6月19日、唐津市立西唐津小学校プールにて、海遊キッズクラブの小学1～6年生29名と保護者およびボランティア26名参加のもと、教室を開催しました。「海遊キッズクラブ」は平成16年度に唐津市教育委員会事業として設立され、週末に海浜を中心に青少年の交流を図ることを目的としたものです。唐津海上保安部の指導のもと、教室では3つの自己救命策や着衣泳の体験を行いました。

■(社)琉球水難救済会

琉球大学教育学部付属小学校の3学年学級PTAより要請を受け、NPO沖縄ライフセービング協会および中城海上保安部の協力を得て、平成22年7月17日に同小学校体育館とプールで教室を開催しました。体育館で海の安全について講話が行われた後、プールで背浮きやライフジャケットの着用を体験。スポーツゲームも交え、参加者は親子で楽しみながら海辺での安全意識を高めていました。

ひたちなか・磯崎小で講習

水難事故防ぐ知識を

ペットボトルを使って水に浮く方法を体験する児童たち＝ひたちなか市立磯崎小

■茨城県水難救済会

平成22年7月16日、ひたちなか市那珂湊第二小学校、那珂湊第三小学校、磯崎小学校において教室を開催しました。

茨城海上保安部から海上保安官を講師としてお招きし、海で遊泳する時の注意点について講習を行ったほか、着衣泳やライフジャケットの着用、ペットボトル等による溺者救助などを体験していただき、海浜事故の未然防止と海難防止思想の普及を図りました。

この教室の様子は、地元の新聞にて写真付きで報道されました。

■大阪府水難救済会

平成22年6月28日～7月6日に、4ヵ所の幼稚園・保育園で教室を開催しました。いずれも、水難救済会がボランティア教室を行っていることを口コミで知り、開催を依頼されたものです。

教室では園児に海浜事故の防止について説明し、身近なペットボトルを使った救助方法の実演や、救命胴衣着用を体験。また、家に帰ったら家族の皆さんに救命胴衣着用の大切さをお話するようお願いしました。

■NPO長崎県水難救済会

海に親しみ「海の日」の意義を再認識することを目的としたイベント「海フェスタながさき」の実行委員会より要請を受け、平成22年6月22日に教室を開催。長崎市立神浦中学校にて、中学生32名を含む51名参加のもと実施しました。

教室では、海上保安庁の活動の紹介や海浜事故の回避方法、そして事故遭遇時の救助方法やロープワーク、手旗信号などについて講演と実演を行いました。思いのほか、子どもたちの海についての知識が少なかったことが印象的で、ボランティア教室の重要性を改めて実感する機会となりました。

VOICE ボランティア参加者の声

ボランティア教室に参加した児童による感想やコメントを紹介します。

「ボールやランドセルでうけてよかった」

（千葉県／小学4年生）

わたしは、7月10日に着衣水泳をして、服をきてプールに入ったので服が体にまとわりついたのでとても気持ち悪かったです。でも、「もし川に落ちたらこんな感じなんだな」と思うと一生けんめいにやらなきゃいけないんだと思ってもやっぱりさむかったです。でもボールやランドセルで少しうけてよかったです。

「もし自分がその場に居たら…」

（富山県／中学3年生）

今まで関わることの無かったAEDや救済だったけど、今日教えてもらって、すごく重要なんだなと思ったし、人の命に関わることだから、おもしろ半分でやってはいけないと思いました。

もし自分がそういう場に居たら、見て見ぬふりをしないように、そして勇気を出せるようになりたいです。

「着い泳を終えて」

（福岡県／小学4年生）

ぼくは7年間水泳を習っていたので、泳ぎには自信がありました。でも、洋服を着て水にうくことがあんなにむずかしいとは思いませんでした。うくことができたら長時間でも大じょう夫だと思ったけど、3分間うくことがあんなにきついとは思いませんでした。

水の中で服を着てくつをはいたらしずむと思っていたけど、ういたのは意外でした。

海や池でおぼれたら、今までは泳げばいいと思っていました。でも、助けが来るまではあわてずにういていた方が、助かるかくりつが高いということが分かりました。おぼれている人を見つけたら、118番に通ほうすればいいということも初めて知りました。

本当はおぼれないのが一番いいけど、もしもの時には着い泳を知っているのと知らないのとでは全ぜんちがうということが分かりました。夏休みは水なん事こにあわないようにします。

「人が助かる人工呼吸に感動」

（沖縄県／中学1年生）

今日の水難救助ボランティア教室は、とても、たくさんの事を学びました。海で安全にすごすためには、どうしたらよいか、目の前で人がたおれていたらどうするべきか…など色々な救助のしかたがわかりました。今日やっていて、難しかったのが人工呼吸でした。でも、これで人が1人でも助かるんだなと感動しました。これからは、海に行く時などは、安全を考えて楽しく過ごしたいと思っています。今日は、本当にありがとうございました。

互助会事務局より

1 互助会入会（更新）時期について

ご案内のとおり、22年度・互助会入会（更新）時期は、
加入申込日　22年8月31日（原則）
会費納入日　22年9月30日（原則）

＊災害補償・見舞金給付対象は22年10月1日からとなりますが、会費納入が遅れますと、効力は会費納入の翌日からとなりますので、ご承知おき下さい。（年度途中加入についても同様です。）

2 加入者数の現状について

加 入 者 数　22,069名（22年7月現在）
救難所員数　54,969名（22年3月現在）
加　入　率　40.1%

3 給付事業発生状況について

私物等損害見舞金給付　2件（22.6.28付）愛知県水難救済会管内

4 互助会加入案内について

年会費500円での災害補償および各種見舞金等、他に類を見ない制度・内容であると確信しております。また、見舞金給付内容等については実情に合わせ見直しを行い、より充実した内容にして参りたいと考えております。

互助会規則等ご理解の上での、加入をお勧めします（次ページ参照。）

5 問い合わせについて

互助会についての、疑問・質問等、問い合せ先は
事務局　五十嵐又は、山口が承ります。

救難所員等の皆さんへ!!　500円で大きな安心を!

MRJ互助会・会員募集

日本水難救済会では、「災害共済制度」に替わるものとして「日本水難救済会救難所員等互助会」（以下「MRJ 互助会」という。）を設立し、平成 20 年10月1日から運営いたしております。

MRJ 互助会は、会員および家族（以下「会員等」という。）の互助救済と福利増進を図る観点から、各種事業を行うことにより、会員等の生活の安定と福祉に寄与することを目的としております。

なお、年会費（500円）、入会手続き等は従来と同様です。（規約等参照）

ぜひ、多くの皆様に会員になっていただけるよう、お願い申し上げます。

事業の内容

1 災害給付事業・・・規約第14条

・東京海上日動火災保険（株）と契約
・会員が、水難救助業務中に災害を受けた場合の補償

2 休業見舞金給付事業・・・規約第 15 条

・会員が、水難救助業務中に負傷し又は疾病にかかり、従前得ていた業務上の収入を得ることができない場合に見舞金を給付

3 私物等損害見舞金給付事業・・・規約第16条

・会員が、水難救助業務遂行中に携帯していた私物を破損、消失、遺失した場合、損害額の半額又は3万円のうち、いずれか少ない金額を給付
・会員が、水難救助業務遂行中に使用していた船舶の船体・属具を破損等した場合、損害額の半額又は10万円のうち、いずれか少ない金額を給付
・ただし、損害額が1万円未満の場合は給付の対象としない

4 遺児等育英奨学金事業・・・規約第17条

・災害給付を受けた会員の遺児に対して、遺児育英奨学金の給付及び貸与を実施

5 災害見舞金給付事業・・・規約第18条

・自然災害又は火災等により、住居及び家財又はそれらのいずれかに被害を被った場合に見舞金を給付

社団法人　日本水難救済会　TEL.03-3222-8066　日本水難救済会救難所員等互助会　事務局

MRJ フォーラム　読者の広場

全国各地から寄せられた投稿を紹介します。

日本水難救済会118回総会を開催

公益社団法人への移行認定申請を行うことが承認されました

平成22年5月21日、千代田区平河町の海運クラブで第118回通常総会が開催されました。

議案は、平成21年度事業報告案、平成21年収支決算案、平成22年度事業計画案、平成22年度収支予算案、役員選任案の5つ。また、「公益法人制度改革への本会の対応」について審議が行われました。その結果、「公益法人制度改革への本会の対応」として公益社団法人への移行認定申請をすることが承認されたほか、移行認定後の定款案および関係規則案、移行認定後の役員の選任案についても承認されたことから、今後所要の手続きを進めることとなりました。

他の議案もすべて承認され、最後に海上保安庁長官、水産庁長官（代理漁政部長）からご挨拶をいただきました。

多数の出席者のもと、粛々と開催された総会

帝国水難救済会締盟状などを寄贈していただきました

戦前の貴重な資料が、本会のもとへ戻ってきました

平成22年4月13日、川崎市在住の長秀行氏が本会を来訪、御尊父故直一様が所有されていた日本帝国水難救済会の帝国水難救済会締盟状ほか5点を当会に寄附されました。同氏は現在、川崎市でボーイスカウトの指導に当たられています。

以前ご一家は港区青山にて眼科医を開業されており、水難救済会に多額の寄付をされるなど、本会を側面から支えていただいていたとのことです。

寄贈された締盟状等は戦災で水をかぶったとのことで、傷みや汚れはあるもののご家族がこれまで大切に保管されていました。

本会坂本茂宏理事長と、長秀行様

帝国水難救済会締盟状他4点寄贈

INFORMATION

●助成金を受けて行う事業には助成団体を明示

本会および地方組織が行う事業には、日本財団をはじめとする団体から助成金等の交付を受けて実施しているものがあります。ご承知のことと思いますが、海難救助訓練などがこれに当たります。

従って、看板や訓練資料、機材などを購入あるいは作成するに当っては、これら助成金を受けている団体名を必ず表記するよう、改めてお願いします。

●日本水難救済会会員募集

日本水難救済会では、会員（2号正会員または賛助会員）となって本会の事業を支援していただける方々を募集しています。

2号正会員資格は、本会の事業目的に賛同して、年会費1口1万円（1口以上）を納付された方で、会員になりますと、総会に出席することにより当会事業に参画できます。

賛助会員は、金品を寄付することにより本会の事業に貢献いただくもので、寄付された方は、法人税・所得税の控除を受けられる特典があります。

希望される方は、当会にご連絡いただければ、入会申込書をお送りいたしますので、必要事項を記入してお申し込み下さい。

編集後記

☆当会名誉総裁高円宮憲仁親王妃久子殿下の観閲式へのご臨席は2年ぶりとなりました。名誉総裁におかれましては船上で海洋少年団との交流をされ、その暖かいお人柄に触れることができ、グラビアにもそのご様子を掲載することができました。

☆マリンレスキュー紀行の第3回目の取材先をを千葉県水難救済会鴨川救難所にお願いしました。女性の救難所長は珍しいですが、所員を束ねているリーダーシップと、所長を盛り立てている鴨川救難所の皆様の心意気は素晴らしいものですね。次号の取材は12月頃となりますが、取材を希望される救難所がありましたらご連絡下さい。

☆マリンレスキュー MONOギャラリーは、海上保安庁羽田特殊救難基地の全面的なご協力をいただきました。次号も宜しくお願いします。

☆歴史探訪シリーズは今回も金刀比羅宮禰宜の琴陵泰裕様に執筆いただきました。金刀比羅宮の歴史とその奥深さに感銘を受けております。

☆今年の7月で洋上救急の出動件数が700件を超えました。これまでに洋上救急に従事された医師看護師の皆様のご協力に改めて感謝です。

（常務理事　上岡）

制作・印刷　エイアンドエー株式会社